

これからの 保育室と遊戯室

日下 あこ

①

はじめに

建築家は何を考え、設計計画の研究者は何を研究しているのでしょうか……

よく建築家は建物のお医者様に例えられます。医者と薬剤師が別なように、建築家と施工業者とは本質的には別なものです。建築家は建物を診察し、または新しく建てたい人の希望を聞いて、どういうところを、または、今後どういう形のものを作っていけば、中に住む人の生活が健全に伸びていくかを考え、処方箋すなわち設計図を書くのです。これを施工業者に渡しますと、業者がこの設計図に合った建物を作ってくれるわけです。ちょうど薬剤師が処方箋通りに薬を調合するように……

それでは、建築の研究者は何をするのでしょうか。設計計画の研究者は、建築家が診断する時の判定の根拠になる資料を作る人です。つまり科学的な方法で、建物の中で行なわれる生活と建物の計画との間にあるさまざまな法則性を探究し、この蓄積の上に設計計画はどうあるべきかの指針を出していく人達です。

私は、東京大学の大学院生時代にこの設計計画の研究室におりました。この研究室（古武泰水教授の）では、建物を、学校・病院・住宅などと性格別に分け、各々での生活を絶えず見続けながら、この建物の計画を考えていく系列的な態勢が組まれていました。ここでこれから述べますことは、この研究室で十数年前から幼児施設研究グループと呼ばれた系列が蓄積してきた現在の成果です。

しかし、これは設計計画の立場から整理されたもので、教育者の方がごらんになると、例えば保育内容など、かなり違った捉え方がされている向きもあると思います。これはちようど、医者が生理学的な立場から人間を見、文学者や教育者は、また別の形で価値判断し人間を分類するのと同じだと理解していただければと思っています。

しかし、ここでは紙面の都合や一般向の表現をしたために、不十分な面も多々あります。更に詳しくは、建築学会の研究論文を参考にいらっしゃるだけだと思っ

1 従来のプランと従来の保育（一斉的保育）

従来のプラン

揃いの上っぱりに小さなカバンをかけて幼稚園にかよう子ども達の姿は、戦後、都市といわず農村にまで特に目立ってきた光景です。

これは戦前は恵まれていた家庭の子ども達だけを対象にした幼児教育が、戦後、児童はよい環境の中で育てられ、その生活を保障される……という児童憲章によって、家庭の保育に欠ける幼児（措置児）のために建てられた公立保育所や、これと幼稚園との中間的な性格を帯びた私立保育所（措置児と一般家庭の幼児とを含む）が多数建設され、幼児施設が普及した結果と言えましょう。

では、こうして急増した幼稚園の建物の方は果してその内容にふさわしい器になっているでしょうか……

図1-1は、机を置くだけで一ぱいの各組用の保育室が一行に並び、これにガランと広い遊戯室が、離れてついた、どこにでも見られる幼稚園のプランです。ちようど、教室が並び、その端に体育館のついた旧来の小学校を縮小化したような感じをいだけさせます。

日本の幼稚園は明治初年に源を発しますが、その当時法制上では小学校令に附属する幼稚園規則によっていたので、教育思想の上でも、教えこむ形の小学校教育を下へ延長したものであったに違いあ

りません。

その後、幼児教育の思想は小学校においても幼稚園においても、知識をつめこむ教育から、幼児の生活に沿った指導の方へと次第に進歩してきたが、教育者と建築にあたるものとの連絡がほとんどなかったため、建築はその教育の進歩と発展にともなわず、小学校では、教室とこれに共用の体育館がつき、幼稚園では教室を保育室に、体育館を遊戯室に翻訳したようなプランが、今日でも建築家の一般通念として無批判に繰り返されてきているのです。

このプランを見ますと、以下のことが特徴として上げられると思われまます。

- ① 机を置くだけで一ぱいの保育室、とガランと広い遊戯室
- ② 北側の廊下を伝って他組の保育室前を通らなければ行けない
便所と昇降口

従来の保育

さて、こうしたプランの図1の幼稚園では、どんな生活が行なわれているのでしょうか。一般に、先生中心のいわゆる一斉的保育が行なわれますが、それを時刻を追ってこのプラン上で見てみましょう。

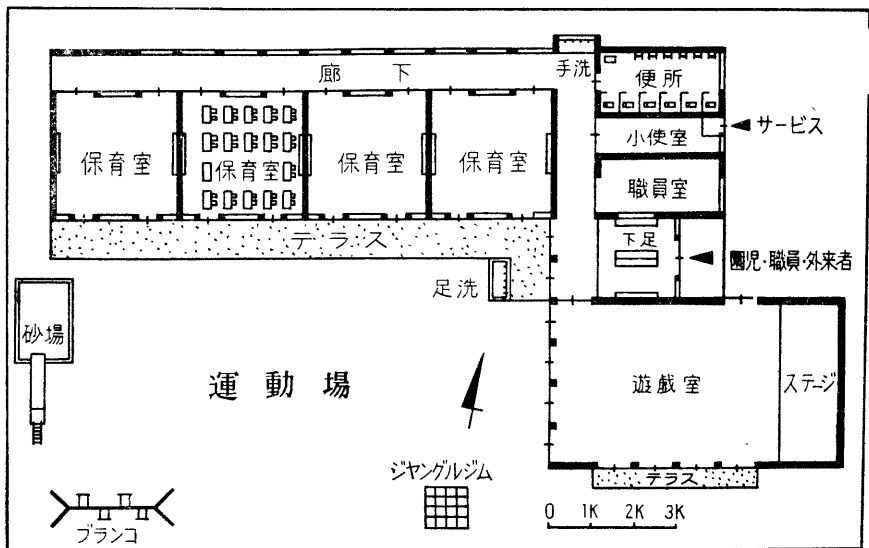


図-1 どこでも見られる従来の幼稚園のプラン (東京 M幼稚園)

さもなければ園児の食事が終わってから職員室に食事に行く。

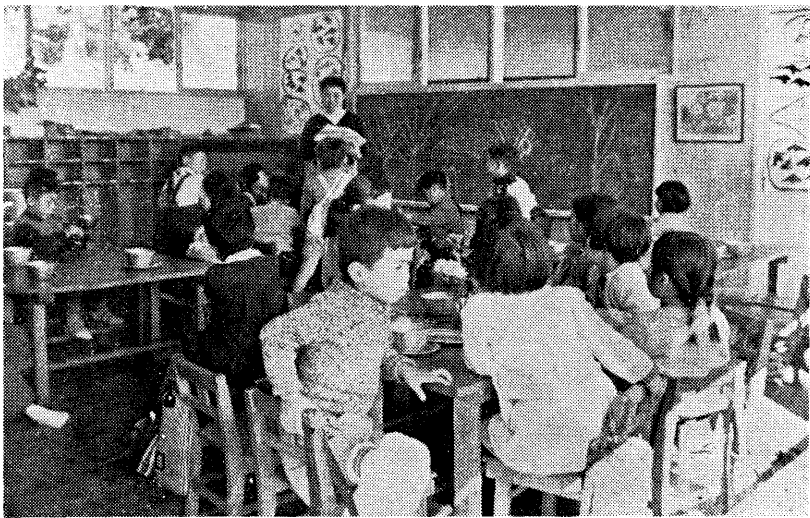
園児全部が食事し終って外へ出た後、当番の子と先生だけが残り、保育室の机を拭くなど簡単な掃除をする。

それから、庭でブランコ・滑り台・砂場などと遊具の遊びや、広い空間で先生を中心とした鬼コッコ・影踏みの遊びが展開する。このときは目立ってはなやかに見えるが、時間は極めて短かく二十分前後である。やがて音楽がはじまり、全園児は一斉に各組の保育室に吸収されていく。

室に入る前と出るときは、かならず便所へ行きたい人を集めて先生が連れていく。また食前や庭から帰ったときは、かならず手を洗い口をゆすがす。それから各組で午後も同様な遊びが先生の指導のもとに繰り返されるのであるが、一般に午前は静かな絵・工作、午後は活動的な歌・遊戯となっている。しかし各児にとつて、遊び舞台は常に保育室の自分の机の前と遊戯室の先生によって並ばされた位置だけである。

二時頃になると、各自がカバンを肩にかけて帰り仕度をし、ふたたび机の前や、ときには廊下・昇降口に並び、もう一度出席をとって家への伝言を聞き、先生に送られて一斉に退園する。

夏は週一、二回は午前中で終わるが、以上が一年中ほとんど変わらない日常の保育である。このほかに月一度位の割で行なわれる年間行事があって、それが経営の面からも、しばしば建築を左右するほ



写真一 2 保育室で行なわれる食事

早い子は10分、遅い子は1時間近くかかる。

早くすんだ子どもたちのために、先生はすみで本を読んでやる。

写真一3 保育室の掃除

当番の子が先生の手伝いをし、食後または退園時に机、椅子運びや雑布がけを行なう。



どの重きを置かれている。

すなわち、入園式からはじまり、端午の節句、母の日、運動会、遠足、クリスマス、節分、ひな祭、卒業式などの年一回のものに、毎月一回の誕生日会が組み込まれる。この年間行事は、遠足・運動会を除くと、すべて遊戯室で行なわれる。すなわち全園児がここに集まり、先生から行事の話を聞き、その後リズム遊びをしたり、太鼓・カスタネットなどの楽器を鳴らしたりして遊び、これを母親が参観するといったものであって、対外的にも相当重要視され、ステージ・観覧用の中二階までつけて遊戯室がとくに力を入れて作られているのもこのためである。

こうした園の日常の生活を整理してみますと、

- ① 保育室または遊戯室で行なわれる、先生の指導による全園児一斉の遊びの時間、いわゆる学習的な時間、と
- ② 登園時、昼食後などに各児好きな場所で自由に遊ぶ時間、いわゆる小学校の遊び時間、さらに、
- ③ 幼児の生理的行為に関連した食事・用便などと園全体の管理上からくる登園・退園時の出欠席および食後の掃除・後片付けの時間に三大別されます。

保育の反省

こうした①のような保育では、幼児の自発的な要求によって保育が行なわれることがなく、常に先生の指導のもとに組全体が同一の行動を取るよう、しつけられているのですが、実際には、一組三〇人から四〇人も幼児が同一時に同一興味を感じ、同一時間後に飽きてくるなどということはきわめて稀であって、これは時間を追って写真その他でスタディした資料を見ると非常にほつきり表われてきますが、普通に観察していても、興味に乗らない児や飽きてきた子、ボンヤリ放心している子がかならず生れ、これが少し高じてくると、わめいたり、ケンカを始め、保育がこの子どもたちのために中断することも必然的に起ってきます。

また、こうした一斉的な保育では、すべて先生中心で保育が進むるので、指導者がなくなると、たちまち放任、混乱状態におち入ることになります。ところが、この中断は幼児を対象としている場合必然的に起ってくるので、例えば、三才では用便に行きたくなっただい脱衣がひとりできないとか、四、五才位でも中には切紙細工のときにハサミが使えなかったり、粘土細工のとき洋服の腕がまくれなかったり、その他水彩画の絵具を洋服にひっかけたり、プラシコがぶつかったりする突発事故が絶えずあるのですが、このたびに先生が一人の子にかかると、指導者中心の保育は機関車を失った列車に似て、途絶し、他の子は放任され、保育はたちまち乱れてしまふのです。

更に遊びの種類からこの一斉的保育を見ますと、先生が中心になり、幼児全部が同一場所で行なうができる遊びとなると、先生自身も役者になる紙芝居・話と、先生が課題を与えてこの引かれた軌道上を幼児全部が行なう、絵画・製作・リズム音楽などに限られ、創



写真一四 保育室での終園の挨拶

家への伝言、明日の打ち合わせなどが、先生から各自に伝えられる。

造遊び、小グループの遊びなどはこの一斉的な保育形態では行ない得ないものとなつてきます。このことは、単に遊びの種類を貧困にするばかりでなく、幼児の創造性を伸ばす機会をも失つてしまつているとも言えます。

② は、自由な時間ですが、実際には時間も短かく、この時間に個性を伸ばすような遊びに集中するというよりは、もっと息抜きのな時間です。

この時間は、園の全部の子どもが一時に開放されるので、数少ないブランコなどは、先に走つて行つた年長児に占領されてしまふし、せつかく砂の山が築かれ、トンネルを掘ろうと思つても、集合の音楽が鳴つてしまうような、いわゆる「学校の遊び時間」に似たものですから、ここで、豊富な遊びが展開する時間も空間も考慮されているとは言えません。

③ は、幼児の個々の生理的な要求によるのですから、これを一斉にまとめてというのは本来は無理な話です。

便所は五才は独りで行きますが、四才では先生がついて行つて見守つてやる必要があるし、三才では、脱衣からお尻を拭くのみでしてやらねばならないことがあります。

これを一斉にまとめて行なうのでは先生の負担もたいへんですし、このたびに保育が運転台を失つた車になつたのでは困りものです。便所の方から保育に歩みよつてくれるというような解決の余地

はないでしょうか……

まとめ

今回は、一般的に建っている幼稚園のプランを示し、ここで一般的に行なわれていた生活を紹介し、更にこの生活が今では少しずつ反省されてきたことを述べました。

次は、最近行なわれており、将来も意味があるものとして生きてゆく保育を紹介し、この保育を従来のプランで行なつた時に生じてくる諸々の困つたことをお話ししましょう。

最後の号に、それでは、保育室は今後はどう構成して行くのがよいかを具体例を上げて説明することにしましょう。

古い酒は、古い皮袋に、 されど

新しい酒は 古い皮袋に入れるな、

もし、新しい酒を古い皮袋に入れたなら、

酒はほとばしり、古い皮を突き破り、

私どもは、酒も袋も 共に失うことでしよう。

(戸原義信建築研究所々員・一級建築士・工博)